第二卷の『青樓年中行事』には九枚挿畫が入つてゐる。

一、『八朔の圖』
二、『良夜の圖』
三、『倡客初會の圖』
四、『狎客の圖』
五、『居つづけの圖』
六、『後朝きぬきぬの圖』
七、『倡家の法式』
八、『餅つきの圖』
九、『倡舖張付彩工の圖』

## 第一圖
## 『八朔の圖』

毎年八朔卽ち八月一日に遊女達に白い著物を著せる儀式がある。この日白衣をつけて仲の町歩く遊女の姿は時の人の好奇心を唆つた。ただ一日の僅か數時間を飾る爲めに、時の偉大な畫家はその白の著物の上に繪を描かれるものである。光琳が繪を描いた八朔の著物を有名な薄雲大夫といふ遊女が著たといふことである。

『此時白きいろを以て、伊達風流となし白繻子の羽折、白柄の大小など、總て流行のものみな共に白く、馬も白きを以て候士子弟の秀異とす。されや此のさとにも自ら白き衣裳を着せしより發り、殊更八朔には、白帷子を禮服となすことなれば、その日倡妓のことさらに白衣を着たるが、衆目の視るに賞讃せられしより、格例となりて、享和の今に至る迄、毎年八朔の衣裳、白無垢を着し清潔をかざり、越女の幽を欺く事得もいふべくもあらず』




## 第二圖
## 『良夜の圖』

本圖は土手八丁を見渡す廊の二階に遊客が月見の宴を張り、夏の良夜をあくまで樂しんでゐる場面である。

『この夜座敷々々の造物等美麗を盡し、臺に木を植ゑ山を築い

て、提灯星のごとくにつらね、串戯（だうけものまねはやりうた）新曲、たいこ末社の藝づくし、傳吉が妙音松藏が妙手、七平が滑稽無雅にしておかしく、藤治が三つ指又興あり。盃の影席上を回り、臺積みの山に似て名殘を惜む』と一九は書いてゐる。

確に吉原遊女の教育は、彼等をして詩的な感情に豊かなものに作りあげた。夏の良夜は銀色の微光に包まれ、美しいメランコリクな壯嚴美の世界を築いた。遊女達の優美な感情は悲哀な抒情詩を歌ひ月の卽興女歌人とならせた。

ゴンクウルの原文に『吾妻』『龜菊』その他二名の遊女が『月を詠める』の歌と出してゐるが、原歌が不明であると同時に、普通に詰らない廓生活のあじきなさを月に寄せて歌つたものに過ぎないから、ここには錄しない。

## 第三圖
## 『初會の圖』

その頃の鶴鳴樓主人の詩であるとして一九が引用してゐる。

『綺紗燈宵闇如レ沸、月光相對笑聲內、
粉頭來往闘芳隣、羅綾綢繆通二姉妹一、
東家西家有二絡盛一、裝殺飣餖自滿レ簍、
豹胎間挾鯉氷膾、烏攬分レ椶椰玉生、
琴瑟彈畢自清風、堂上人語桂花中、
一般色藝三千戶、亦有二愁顏隔レ檣住一。

第四十五圖　當時全盛美人揃　小紫

第四十四圖　當時全盛美人揃　雛鶴

遊女が初めての客を振ることは彼等の自由である。その場合を思ふと、ここに恐らく捏造したものであらうがかういふ物語がある。高尾大夫といふ遊女が一情夫のために仙臺侯を振りつづけたと云ふことである。侯は彼女を得る爲めにあらゆる手段を用ひたのもその甲斐がなかつた。處で侯は彼女を船遊びに誘ひ出し、彼女を殺した後で隅田川に投げ入れたさうである。

若し君が初會に不愛相極まる取扱を受けても怒つてはならない。君は二度目に『裏をかへす』の規定を行ひ、三度目の訪問で所謂馴染に達することは必要である。日本人は青樓へ遊んでその家の著物に著換へることになつてゐるが、それを著れば誰かれの差別なく、階級は忽ち消えてみな平等になるのである。

『若者客を誘いて座敷に請じ、盃を出し硯ぶたを運ぶうち、火鉢の火は漸くに起りかかる、燭臺の蠟燭未だ暗うして四隅に足らず、床の間の前に多葉粉盆堆くならべし中に、梨地に眞鍮のかなもの光り、火入の透明(すきとほり)まできら〳〵しきは、全盛おしよくの調度にて、まだ見ぬさきにおのづから其主を顯はしたり。次に黒塗の木地には見ゆれども、火入灰吹ともに不掃除の光を失ひ、高蒔繪の兀けかかりしは、年明の煙草盆、讓られし女郎にや、但し俗にいふぐうたらべいの貰かと思はれ、猶少妓(しんぞう)の回したばこ盆、少し離れて末座にあり、頓て相方打連れて席上にすはると』とあつて、一九は縱橫無盡に吉原文學を振りかざして、遊女の心理を說いてゐる。

第四圖

『狎客の圖』

第五圖

『居つづけの圖』

馴染になると客は相方とお取膳でさし向ひ、彼女の紋章のついた茶碗と皿と象牙の箸を用ひる。これは客と相手とが完全に結婚したことを意味するのである。客は『馴染』になつた時惣花をその家の奉公人一同にくばらざるを得ないが、大きな遊女屋になると五十人位もゐるのである。

かく馴染になつた客がいつか所謂居續けをきめ込むやうになる。一九の文章にかう書いてある、『色陣の內に迷ふは、人情の私にして、ここに佗傺するがゆへに、歸路を忘れて居續の碇をおろし、得手に帆を十分あげたる床の海に、また舟を漕ぐ女良を寢こかし、起出たる客の顏はかな盥に移つて靑く、軒をうつ雨だれの音はしづけく、湯をふれる禿廻しの群は、廊下中に響きて高し。』

それから彼は遊女の部屋生活をこんな工合に書いてゐる、『この時火鉢にかかりたる小鍋



の蓋泡をふき出し、ぱつとたつ灰とともに禿急いで丁足の膳を直し、喜の字屋の細根大根、紫蘇卷の梅ぼし、蓋茶碗に堆高く、胡摩揚の附燒は隣座敷のおくり物、所せきまで並べたてて客へすすむ。誠や居つづけの遊樂は、事足ずしておのづから備り、見るにきくにそのくさ〴〵する中にも、あはただしく駈込む若者は、埃はたきの無心にきたり、ひそ〳〵這入る呉服屋は雛形紛失の催促をして歸り、紅粉のつきたる爪楊枝に、かかとをつつきしやり手の私言は新造の耳をこすり、敷居にころがる椎の實に、障子のあかぬ髮結のじれこみは、禿の身にかかりて危く、大神樂にひかれて出る親仁客は、相方小妓に附合つて表座敷に欠びをし、迎ひに來る茶屋の男は、猫を抱いてやり手部屋に、多葉粉入の底をはたく、ト巫をまつ姉女良、丈長の鉢卷をしてすはり、告口にまはる部屋持、びんさしをそらして走る。』一九の描寫微に入り細を極めてゐる。

處でこの居續けの度が重なつて、『女良は客の懷を案じ客は女良の苦界を察し、節句紋日の相談に身の詰りとなる知惠を震ひ、はじめ端手に遊びしにひきかへ、今は漸く三度に一度、內藝者を揚るも痩我慢にして』となり、ついに遊女の狎客となるのである。狎客を持つた遊女の身の破滅は狎客と共に悲慘だ。一九は最後に、『客は猶更不都合のことのみ多く、家業も手につかずしておこたり、遂に其身を斃すにいたる。古語に妓女に色荒して、情倦

忽裘敵れて、金盡れは亦歡寡して愁殷たり』と書いてゐる。

第五圖は卽ち居續けの客の朝起きて屋外の雪景色を見てゐる場面である。今しがた起きたといつたやうな遊女達は部屋の掃除をして、火鉢に炭をついでゐる。禿は洗面の金盥に湯を入れて持つて來るが、それはお茶を前に置いて庭を眺めてゐる客が顏を洗ふ爲めであらう。

第六圖

『後朝きぬきぬの圖』

遊女が男の羽織を後ろから肩に乘せてゐる所や、ある男は頭巾を被つて段々を下りようとする所や、坊主が獨り遊女の部屋を出て來る所や、遊女が階段の欄干に兩手を凭せて愛想よくやさしい『左樣なら』を云つてゐる所や、詰り出來るかぎり艶な愛敬を振りまいて客に別れる場面の圖である。

第四十七圖　當時全盛美人揃　花紫

第四十六圖　當時全盛美人揃　唐土

## 第七圖

### 『倡家の法式』

客が馴染の遊女に內證で他の遊女に遊んだりして不實な行爲をすることは全然吉原で禁ぜられてゐた。それ故その遊女はかゝる男を罰する權利を持つてゐる。彼女はこの不實の男を捕へるため新造をやつて彼の行く家を見とどけさせ、その歸路を待ちぶせして力づくで彼を自分の許へ連れて來る。そして思ふ存在に彼に惡戲をして敵を打つのである。

この第七圖は有罪の男が禿の扮裝をさせられ、馴染の遊女の前に跪づいて詫を入れてゐる所である。そして裏切られた犧牲者の華魁は朋輩の遊女達を集めて笑ひ騷いでゐるのである。

『少妓(とんさう)駒下駄の鼻緒を切つて溝へ踏こみ、客用水桶を小桁となして、手桶の水を天窓よりかふり、誰そや行燈をひつくりかへし、井戸端にすべりこけて軒下の犬を驚かし。おくり物をさげ行く茶屋の男に鉢を割らせ、狼狽もて讃取のてんぺん棒にはゆきあたらず。にけ出す羽折は斜りひらつき、追かくる振袖は朝風にひるかへり。見物人の山をなしてゆく道をさへぎり。終に多勢に捕へられてかの馴染の家にいたる』と不實の客が捕へられる場面を、一九はさう書いてゐる。

第八圖

『餅つきの圖』

これはお正月の餅つきの畫で、遊女屋のもの誰も彼もみな一緒になつて愉快さうに餅を造つてゐる。客らしい男も土間に腰をかけてその有樣を眺めてゐる。

第九圖

『倡舖張付彩工の圖』

本圖は畫家が遊女の店を飾る部屋の板戸板全體に大きな鳳凰の畫を描いてゐる所である。

——この畫家は歌麿自身によく似てゐる。

本圖は『青樓年中行事』の目次に記入されてゐない。またその目次は可なり亂暴に作られたもので、その文字が挿畫の下題とも一致してゐない所さへある。

本書が出版された頃吉原の遊女は四階級に別れてゐた。

第四十九圖　錦繡歌麿形新模様　文を見る女

第四十八圖　口紅をつける女

第一階級は、仲の町の遊女。
第二階級は、中店の遊女。
第三階級は、小見世の遊女。
第四階級は、切り店の遊女。

第一位の青樓の數は第二位のものの三分の二、第二位のものの數は第三位の十分の一、第四位の遊女屋は第三位の數より四分の一多かつた。それ故第一位の遊女屋の數は極めて少くなかつたのである。有名な遊女は非常に限られてゐて、一般に歌麿の如き畫家達の筆が描いた女はその有名な遊女のみであつた。

十八世紀から十九世紀初頭にかけて江戸の全住民に對し、吉原廓中に住んだ女の總數は六千三百人に過ぎなかつた。そしてその六千三百人の女のなかで淫賣婦の數は二千五百人と數へたのみである。

今吉原に生活してゐた男女はその屬すべき階級が定つて、その仕事は異つてゐたが、それを私は明瞭に語ることが出來ない。然し太鼓持と藝者といふ特殊のものがあつて、その生活狀態は歐羅巴には殆ど知られてゐないものである。

太鼓持は客に愉快を與へるといふのが商賣の人間で滑稽な同伴者であつた。廓の粋な案内役で、藝者と同樣に茶屋から招かれて『婚姻』の場席に臨んだ人間であつた。そしてその『結婚』を花やかならしめる役目を勤めた人間である。日本人の語る所に依ると、太鼓持は非常に氣の利いた、眼から鼻へ拔けた江戸のことすべてに通じてゐたやうである。彼等は人に怠屈させない性格を持つてゐた。人は彼等に何の遠慮なく何事をも打ち合け、何の心配なく如何なる祕密をも語ることが出來た。彼等はさういふ心の置けない人間である、そして彼等は言葉通りに正直と來てゐた。彼等は一定の給金と客が特殊に與へる『花』以外に何物も受け取らなかつた。

かかる卑しい職業についてゐたが、太鼓持は立派な教養を受けてゐたものである。故に吉原以外でさへ金のあるものならば、船遊びする時とか隅田川の土手を散歩する場合などは、太鼓持ちを連れて行つたものであるさうである。この不思議な人間と一緒にゐると君は一秒たりとも怠屈しない。彼は君の希望する以上にお喋りしない。彼等は君の不快を一掃して了ふことの出來るだけの伎倆を持つてゐた。この太鼓持といふ男は、君が餘りに飮みすぎた場合に勘定の誤りの無いやうにと、確實に君の財布や貴重な品を保管す



る。君が土手の上の茶店に休憩する、或は薔薇色に周圍を色どる花盛りの景色を通るとする、この場合に隅田川を向一層面白く眺めさせて呉れる奴は太鼓持である。彼等をつれて料理屋へ這入ると、君は最上の部屋に通され、君の注文した品々は完全なものとなつて顯はれる。尙彼等はどこの家とも懇意にしてゐて、彼等によく思はれないとその家の商賣はなりたたない。藝者の大勢ゐる酒宴の席で、君のために進行係の役目をするのは彼等である。ここに於て太鼓持がどうしても必要である、彼等はすべてを甘く動かし、また藝者全體を上氣嫌にさせる。

太鼓持は歌ふことも踊ることも、また茶番を演ずることも出來たのであるが、適度にその才能を抑へた、そして藝者に暗い陰に坐らせるやうなこともないだけの用心は忘れなかつた。彼等は二流所の青樓へ出入しなかつた。この二流所の家へ呼ばれてゆく太鼓持を『野太鼓』と呼んだ。詰り本物でない太鼓、田舍の太鼓と云ふ輕蔑の意味を持つのであらう。

仲の町の大通りを出入する藝者を『見番』と呼んだ。彼等はどこへ行くにも女同士二人づつであつた。このことは彼等が祕密の行爲をしないことを說明し、また男から挑まれる場合の護身でもあつた。若し彼等に不都合な男との關係があると直に彼等は吉原から除外される。一般に彼等の行爲は咎むべきでないとされてゐた。かういふ階級の女と、全く階

級を異にした男との結婚が多いのを見ても、彼等の純白であることは說明される。

藝者と太鼓持とはその事務所の支配下にあるので、そこに彼等の名前の書かれた木製の札がイロハ順に懸けられてゐる。所で彼等に席がかかると直に、事務所に於ける彼等の札がはづされて、口をかけた家の名前の下へ懸け直されるのである。

二流所の家には家附きの藝者がゐてそこに住み込んでゐる。

青樓では直接に藝者や太鼓持を呼ぶことは出來ない。いつも彼等の事務所を通じなければならない。大火でもない限り彼等は定刻以上に招かれた家に留まることが出來ない。若し定刻を過ぎた時には呼んだ家はこれに對する賠償金を拂はされる。そして彼等は規定通りの或る期間その組合の出入を禁ぜられる。

吉原以外の所へ藝者を呼ぶ場合には、數日前からそのことを茶屋を通じて申込んで置く必要がある。藝者は客と一緒に散步したり小旅行をする場合には、いつも茶屋の男衆か箱屋が一緒について行くことになつてゐる。ここに不思議な命令がある。太鼓持や藝者が遊女の部屋にゐる時は、彼等はその遊女に主從の尊敬を拂はなければならないことである。なぜならば大夫達はお后樣のやうに取扱はるべきであるからである。



## 一六

有らゆる浮世繪師は吉原を描いた。北尾政演は『傾城新美人合同筆鏡』を作り、勝川春章と北尾重政は『青樓美人合姿鏡』を出した。北尾政演は『傾城新美人合同筆鏡』を作り、勝川春樓美人合』を出版した……林氏は日本に所有してゐる書物を二百種以上も所有してゐるさうである。北溪は『吉原十二刻』を、春信は『繪本青る書物を二百種以上も所有してゐるさうである。

然し殆ど全ての日本畫家が吉原を取扱つた場合、そこに描かれた女性の群は多少理想的になり、仲の町を支配する壯嚴な法則或は輝やいた刺繡を施した著物の陳列に對する說明であり、また時には遊女の性格や職務に關係のない女さへ書いてゐる。實際歌麿以外にだれあつて吉原遊女の日夜の私生活を、描線と調色とで物語つては居らない……このことは不思議なことである。歌麿と競爭の立場にあつた畫家卽ち女の長いすらりとした姿を描かいた豐國は、時々構圖に不確實なものを殘してゐるが、彼の靑樓に關する書物を研究する

ことは興味の多いことである。歌麿の本と豊國の本とが同時代の出版であるだけにその比較研究の興味は一段と深い。歌麿の『青樓』は一八〇四年に、豊國の『青樓』は一八〇二年に公にされてゐる。

然し豊國の『青樓』を分析する前に、私はこの動物的な感覚的な淫賣とはまるで異つてゐる賣淫、卽ち日本の詩的な賣淫についての觀念を與へたいと思ふ。歌麿や豊國の挿畫に於けるよりももつと新しい時代のもので、吉原に外國人が出入し初めた頃の文書であるが、それは『吉原花の知識』とよばれたものである。

——花の上に蝶が二つ……それ等は離れずに飛んでゐる。

——勿論だ、季節は良いし、それ等は花の匂ひに醉つてゐる。

——僕等もまたその蝶のやうに花を訪ねて行かうではないか。

——どうして君に花の知識がある。

——僕は吉原の大夫から學んだ。……

——此處に大門がある。

——どういふ大夫を知つてゐる。

——小紫といふ大夫を知つてゐる。……



——一寸待ち給へ、薄雲大夫がやつて來る。

——彼女は大變人を長く待たせる大夫だ、どうしてもその譯が分らない。

——吉原の大夫達は複雜な化粧の爲めに非常に時間がかかる……まづ彼等は髪を撫でつけるに下村のポマードを使ひ、元結は丁子でなければならないのださうだ。勝山結ひを採るものもあれば、島田に結ぶのを好むものもある。彼等は鼈甲の櫛や珊瑚のついてゐる簪に莫大な金をかけ、その負債が多くなることなんか氣にかけない。顏の白粉、襟の白粉、唇の膿脂、最後におはぐろ、彼等の贅澤を見せないものは何一つもない。

暫くたつて大夫は現はれる。

實際大夫は非常に美しい、目立つ、愛らしい。その眉は遠山の濃霧がかかつたやうで、眼には秋の浪がふるへる。彼女の横顏は氣高く、口は小さく、その歯の白さは富士山の雪を凌ぎ、體の魅力は夏の野原の柳を偲ばせる。彼女の着物は黒天鵞絨の上に金絲で飛んでゐる龍が刺繍されてゐる。帶は金錦で、一言にして云へば、彼女の身支度に一點非難の打ち所なしである。

——僕は花の知識を得る爲めに貴女とお話がしたい。

——けれどもよくお考へになりましたか。この研究は隨分とお骨が折れます。……

私の部屋にお出で下さい。……

大夫の部屋の説明は、既に人に知られてゐるのであるから、詳細にこれを語る必要がないであらう。

六疊の床間には酒井抱一の軸物が三つかけられ、それに花鳥が描いてある。雙六、碁盤、茶の道具、琴、三味線、琵琶等が列べられてゐる。側の書棚には有名な紫式部の源氏物語から爲永春水の小說までも置いてある。

そこにはまた彼女の化粧部屋がある。それは堅氣の婦人のそれと少しも違はず實に華美な感じのする化粧部屋である。

七十センチメートル位の小さい窓があつて、最も藝術的な竹の簾が懸けられてゐる。その內側に化粧机がある。銅の一種の釜が洗面器の役をしてゐる。竹の箍のかかつた木の桶に長い柄のついた手酌がついてゐて、その中に水が入つてゐる。

女の化粧道具は黒と金の蒔繪の小さい器具の中に入つてゐる。金屬性の鏡は漆塗りの臺の上に置かれて、刺繍の施された絹の布がそれにかかつてゐる。それにもまた化粧道具が入つてゐる抽斗があつて、なかに鼈甲の櫛や金の蒔繪の櫛や金銀の簪等が入れてある。これ等こそ日本の女の唯一の寶物である。

第五十三圖　子供と兎

第五十二圖　子供をあやす母親

さて二度目に大夫が出て來る時、今度は、緋の襦袢のやうな寢衣を著てゐて、紫繻子の長襦袢を著てゐる。それには牡丹と獅子が金絲で刺繍されて飾られてゐる。彼女はその黒髪をうしろに垂らしてゐるが、この黒髪に千人の男を引きつける力がある。そしてそれから雪をも欺く眞白な肌膚を見せて呉れる。彼女の顔は梅花のほころびたのに似てゐる、また雨の雫に飾られた梨の花に似てゐる。

——花は弱いものです。どうか花にたびたび水をおやり下さい。

・・・・・・・・・・

今畫家豐國にかへるが、彼の青樓本は『繪本時世粧』と題されてゐる。その第一卷は有らゆる階級の女の境遇が描いてあるが、第二卷目は全體遊女に捧げられてゐる。

最初の繪は仲の町を歩くために出かける華魁を描いたものである。彼女は二人の新造の間にはさまり、一人の新造は彼女の襟を直してゐる。そしてお伴に連れる二人の禿は後についてゐる。

その禿の後から『遣手』と云はれる年取つた女がつづいてゐる。これは遊女の下女であるが友人でもあり顧問でもある。

これはカニヴァル（仁和嘉）の圖である。それに似たものを歌麿も描いてゐる。三味線の大きな塗箱を持つた茶屋女房につづいて、一同の藝者その後をつづいて行く。

これは遊女屋の帳場を描いた繪である。この繪特別な家具が細かく描き出されてゐる。卽ち書簡のはひつた状さし、金銀出入帳に大福帳。褐色漆塗の板の上に白墨で、爲すべきことや命令の箇條その他のことがこまごまと書いてある。その下に用箪笥があつて、その上に書簡箋硯箱があり、また巻いた懸物や扇子、茶壺が絹の袋に入れて置かれてゐる。

隅の方部屋の上部に佛壇が置かれ、その奥に小さな偶像が立てられ、前に酒の徳利、客から貰つた金の封筒が置いてある。その側の壁に折紙細工と小さい赤い玉が縦に一列に釘づけにされてゐる。それと共に阿龜の面がかかつてゐる。阿龜の微笑は、訪問者の機嫌をよくすると信じられてゐて、日本の諺言に『笑ふ門には福來る』といつてある。

部屋の中央に女主人が煙管を杖についてきちんと坐つてゐる。年增の女が彼女の肩をもんでゐる。腹ばひに踞んでゐる女は疊の上に擴げられた絹の反物を見たてゐる。

本繪本の最初の四枚は、吉原仲の町一流の遊女屋を描いたものであるが、五番目の繪は二流三流の『河岸見世』を示してゐる。そしてその繪は遊女の陳列室である。太い格子の間から遊女は顔を出して女賣卜者に身の幸福を占はしてゐる。



その次は南濱卽ち品川の青樓を描いた圖でその内部が示されてゐる。ある遊女はだらしない様子をして、格子窓越しに頬杖をついて、品川の沖を通り過ぎる船を眺めてゐる。またある遊女は出格子の縁に腰をかけ、不恰好に兩腕を出してゐる。また或る遊女は井にかがんで煮た蟹を貪り食つてゐる。その奥では一人の女が腰でも抜けたかのやうに足を投げだし、頸をひねつて口を大きく開け、鼻を宙に向けてその眉をへの字なりにし、三味線の爪彈きに淫猥な聲を嗄らしてゐる。

そのまた次に深川辰己の藝者屋が描いてある。

この圖で一人の藝者が朋輩の女にその腕に刺青した愛の記號を見せてゐる。この愛の刺青をする場合、情人の名前の頭文字だけのこともあれば、また彼の紋だけにすることもある。

そして尚甲驛卽ち新宿の遊女屋が描かれてゐて、遊女達が化粧してゐる所がある。彼等は髪を結つたり顔を作つたり、また歯を黒く染めたりしてゐる。

然し豊國は他の畫家が殆ど筆を染めてないやうな下等な淫賣の繪も描いてゐる。ここに町の木戸口に老淫賣婦が三人襤褸をまとつた穢ならしい様子をしてゐる。この圖は見るも不愉快な人に感じさせる。

この繪本の中で水鄕に於ける特徴を持つ圖を示さう……それは小船のなかで淫賣する女の繪である。夜の空と浪立たぬ夜の水との間に全く靜止した素足黑衣の背高き女一人を描いて、それが闇のうちから葦の屋根舟の上にぬつくと顯はれてゐる。

遊女の生活に關する繪本に於て、歌麿はその三枚續の版畫に於てのやうに、樂々と競爭者であつた豐國に打勝つてゐる。豐國の描いた女は、身體の優美さと擧措のあでやかな輪郭とを缺いてゐる。また彼の作品には橢圓の生命が躍動してゐない。次に豐國が好んで求めようとした滑稽分子は、靑樓の場景を描くに當つてその作品に卑俗性を添へてゐるに止まる。

またこの二人の競爭畫家卽ち歌麿と豐國の才能を判斷する爲めには、歌麿『夜見世の圖』と豐國の同樣の圖とを比較することで十分である。前者のそれは可なり立派な藝術品であるが、後者のそれは非常に通俗的な凡畫である。

第五十四圖　驟雨

## 一七

日本の女はいづれも小さくてまるまるとしてゐる。歌麿はそれを印象的に取扱つてすらりとした女性の一様式を創造した。歌麿以前の鳥居清長も歌麿のやうな様式を取つて、女の體を實際よりは幾分大きくなしたのではある。然し女の肉附がよく肥つてゐたやうに描いてゐる。

日本の女の顔はどうかといふに、その寸法が詰つて幅つたく、佛蘭西の安物のお面に見るやうな平べつたさがある。輪郭の浮き出てゐる特徴に於ても力が弱く、黒眼の優しい生き生きとした點を除くと、その顔は春信湖龍齋春章の女に見るやうな圓い型のものばかりである。

所で實際、その顔を歌麿は長めの圓形となしたのである。そもそも在來日本畫家の描いた人間の顔は悉く宗教的な傳統主義に支配されてゐた。すなはち眼を描くにしても、二つ

の細圓い線のなかにひとつの小さい點を打つだけであつた。鼻にしても鷲の嘴のやうに曲つた筆線によつてであつた、而もこの様式の鼻を日本人すべての鼻に適用してゐる。口は二つの小さい花の花瓣に似たやうなものに描いたのである。然るに歌麿はこの傳統的な人間らしくない顔に、小氣味よい優美、純眞な驚き、精神的な内容を滑り込ませた第一者である。そして彼は正當な線と形とを全て與へて、これまでの人體描寫に見られないやうな人間的な線と形とにした第一者である。その適例は彼の全盛時代を飾る或る作品のうちに見られる。それ等の線で描かれた姿を眺めてゐると、諸君が殆ど普遍的な宗教的傳統主義から出た顔に見ることの出來ない、生命のある眞實の肖像だと感ぜざるを得ない。それは奇蹟的に彼の畫に顯はれた特殊な人間の容貌となつたのである。

最後に日本國の美術史中、藝術家の目的とする女の再現そのことに對する無益な手法の中にあつて、歌麿は女をことに優美なものとすることに努力し、一言にて云へば理想化することを主として、しかもそれに最も成功した畫家である。彼は女性描寫の理想主義的畫家であつて、しかも特殊なその種の畫家であつた。彼の理想主義は作品の形式に、その肉體描寫に、その解剖學的構成に證明せられ、人物の擧動、卽ち優雅な人間の身振に對する最も自然主義的の畫家であつたことを全てに表現してゐる。



そして歌麿の女性研究が殆ど常に青樓の女にあつて、いふまでもなく彼が理想化したものはみな遊女であつた。日本人の言葉に從へば、彼歌麿は遊女を『女神とした』のである。

歌麿は鳥類や爬蟲類や貝殻等を、それは實際に小さい自然の現象であるが、それ等を最も正確に最も確實にまた最も寫眞的に描かうと企てて、そして最も立派な描き手となつた。然しこのことは理想的美人畫家に對し、殆ど本當らしくない信じられない不思議な事柄である。また彼がその當時、その種の最も緻密な博物學的な、同時に最も藝術的な畫家とならうと希望したといふことに對しても奇異の感なきを得ない。彼の自然の生物等を取扱つた作品は次の三繪本の中に見ることが出來る。

『繪本百千鳥。』
『繪本蟲撰。』
『汐干のつと。』

これ等は實際に、歐羅巴の如何なる國に於ても到底印刷することの出來ぬほど精巧無比の木版印刷によつて作られたデッサンである。

今『繪本百千鳥』を見るに、彼は單に青味を帶びた水彩の最も細い筆を用ひてゐる。『雀と鳩』の一葉は實際に私共を惹きつけるもので、また素晴らしいものとしては、『鴨と翡翠』を私はあげたい。本圖の巧妙な纏め方は他に比較すべきものありとも思はれない。この圖の翡翠は體の半分を水中につけてゐるが、それが巧みにぼかされ色の消えて行く工合得も云ふことの出來ない妙味がある。

彩色摺『百千鳥』大本二册は寛政初年耕書堂蔦屋重三郎開板である。その藝術的價値は『繪本蟲撰』ほど高いものでない。その前編には『雀と鳩』『木兎と鶯』『鵜と鷺』『四十雀とこまどり』『かし鳥と鴟鴞』『鴨と翡翠』『鷹と百舌』等が含まれてゐる。また後編には『ゑなかと目白』『山雀と鶯』『鶉と雲雀』『まめまはしと木つつき』『山鳥と鶉鴿』『燕と雉子』『鷦鷯と鴫』『鶏と頰白』等の繪が入つてゐる。前編の序文を書いた人は赤松金鶏である。それに曰く、『それももちどりの春にさゑづり、わたり鳥の秋にゝせる、いづれか心をなぐさめ、耳をよろこばしめざらんや。そか中に、五彩のはねをいろとれる、むらどりの、たちゐのさまを、とりがなくあつまにしき繪に、きた川か筆にそめ、飛鳥のあすかの花にめて、みやことりの、すみた乃月に、うかるるされ歌をくはへて、一まきとし、鳥のおとひさしくととまれとてなん、かくはかり出ぬるも、思へはくちはし青くして、とさかの色のみ、赤まつの金鶏らかくたかけ乃もりの子をみて、うは玉の夜をときなけん事を、もとむとかいへる大鵬乃そしりをかへりみす、みそささゐのよしきか袖に、草むすひするものならし。上毛、赤松金鶏。』

又後編にも同人の序がついてゐるが、それとても『畫本蟲撰』の序文ほどの價値がない。歌麿の圖も實寫生の生み出す所の新鮮味と現實性とを缺いてゐるやうに感じられる。その圖の多くのものは古來からの種本を燒き直したものであらうと想像せられる。

第五十五圖　兩國橋下の圖

大鵬乃そしりをかへりみず、みそささゐのよしきか祢に、草むすひするものならし。上毛、赤松金鶏。』

又後編にも同人の序がついてゐるが、それとても『畫本蟲撰』の序文程どの價値がない。歌麿の圖も實寫生の生み出す所の新鮮味と現實性とを缺いてゐるやうに感じられる。その圖の多くのものは古來からの種本を燒き直したものであらうと想像せられる。

彩色摺『繪本蟲撰』大本二册は天明八年耕書堂蔦屋重三郎開板である。上下二卷に分れ、その上卷に『松虫と螢』『ばったと蟷螂』『蜂と毛虫』『馬追虫とむかで』『けらとはさみむし』『蝶と蜻蛉』『虻と芋虫』『ひくらしと蜘蛛』の諸圖を含み、下卷に『蛇ととかげ』『赤蜻蛉といなご』『蠶虫と兜虫』『蝸牛と蟹』『きりぎりすと蝉』『蚯蚓とこほろぎ』『蛙とかねむし』

『繪本蟲撰』の中で、睡蓮中で蛙の戯れる圖や蜥蜴が蛇に追はれる圖などは實に異常な繪である。そしてこの摺物繪本のうちに青蟲とかばつたとかが、やさしい青色の葉の上とか、或は滿開の花の間とかから浮き出してゐることに私共の氣がつく。またその中には、兜蟲の青銅色で、また蜻蛉の翼のきらきら輝いたエメラルド色の恰も私共の眼をいつはる紗絽のやうな感じさへ與へるものもある。最後にこれ等の圖の彩色が實に最善巧妙である爲めに、實際の光線がそれ等の上に當つてゐるやうに思はれることをいひたい。

然し本繪本の奇蹟的に完全な色彩の外に、歌麿の藝術を研究

する佛蘭西の人々にとり、本書に全く獨得な興味が存在してゐる。何故なれば本繪本の巻頭に鳥山石燕と云ふ歌麿の師匠が書いた序文が載つてゐるからである。彼はこの若い彼の愛する門人即ち歌子の自然の觀察を賞讃してゐる。石燕は歌麿を親しく歌子と呼んでゐる。彼はかう書いてゐる。

『ものの生命を精神的に傳へ、筆にその外形的構成を描くと云ふことは、則ち繪畫の法則である。我が弟子歌麿が今出版した繪本は、蟲類の生命を寫したもので心畫といつて差支がない。私が昔のことを追想すると、歌麿は幼少時代から事物の最も微細なものをよく觀察したものであつた。それ故彼が庭にゐた時は、蟲どもを追ひまはしてゐたので、蟋蟀ばつたの類を捕へては掌に載せて戯れながら觀察するのが好きであつた。私は彼が生物を殺す癖がつきはせぬかといふ不安のために、何度彼を叱つたか知れなかつた。

彼が大きい繪畫的才能を獲得した今日となつてみると、それ



の諸圖が入つてゐる。以上の各圖に二首づつの狂歌が記入されてゐる。この花鳥蟲魚の圖は歌麿一代の傑作で彼の寫生力を遺憾なく說明し盡してゐる。

『心に生をうつし、筆に骨法を盡くは畫法にして、今門人哥麿の著はす虫中の生を寫すは是れ心畫なり。哥子幼昔物事に細かく成るが、ただ戯れに秋甲虫を擊き、はたはた蟋蟀を掌にのせ遊びて、餘念なし。卽ち其生をむさぼらんことを恐れて、あまたたびいましめしに、今の筆策誠に業の德をかかやかせしは、玉虫のつやを奪ひ、古書を辱しめて、車に向ふ蟷螂の鎌をかりて、蚯蚓の土を穿ち、そのさひはつをたたさんと、枠ふりのふりよき圖に、くらき初心、螢の光りに此道をてらし、蜘蛛の巢の糸口をとけと、諸君の狂歌合にたより、彫巧、藤一宗が刀は、櫻木にものして、其起をことわりせよと、乞ふにまかせて、

天明七ひつしの冬

鳥山石燕書』

日本に於けるこの種の文章は概して文字が遊戯に墮したものが多くて、その價値は乏しいのである。然しこの石燕の文章は歌麿研究の上に一二重要な點を明かにしてゐる。故にこれは輕視すべきものでない。第一に歌麿は石燕の傳でなくて門人に過ぎなかつた事がここに明瞭になつてゐる。また歌麿と石燕との關係は幼少時代からであつたであらうと思はれる點である。今日石燕の繪畫はさう價値のあるものと思はれないが、彼がこの文章一つで歌麿と名を連ねて自らを不朽ならしめたといふ事は、確に不思議な幸運であつたといつていい。

等の研究が彼の職業の名譽を作る根本となつたのである。實際彼はその作品で玉蟲の光澤を奪つた、全く昔の畫家をして顏色なからしめた。彼はこの藝術戰のために、蟷螂の鎌を借りたまた地中に孔を掘る蚯蚓を利用した。彼は暗い自然の神秘を照らすために螢の光になつた、また彼は蜘蛛が巢の絲を解くやうに藝術の端緒をほごしたのである。

彼は本書に諸先輩の狂歌合を入れることを德とした。この木版彫刻は藤一宗の鑿の與へたのである。

天明（一七八七年）七年の冬

鳥山　石燕書』

本序文が浮世繪派の革命的宣言であり、狩野土佐の傳流派に對する反抗であることは明瞭である。

『汐干のつと』は彩色摺大本一帖で、寛政九年耕書堂蔦屋重三郎開板である。前と後に『汐干狩』と『貝合せ』圖』があつて、この兩圖を挾む十二頁の上に有らゆる貝類の繪がまばらに描いてある。そして繪の上部に狂歌が記入してある。本繪本の序文は朱樂管江が書き、跋文を千元太が書いてゐる。この序も跋もこの種の文章として面白く出來てゐる。然しいふまでもなく歌

然し歌麿のすべて博物學的藝術の著作中、最も優れてゐるのは『汐干のつと』である。これはその當時に於ける文學社會の人達が貝に關して詠んだ狂歌集である。

最初の畫は女や子供達が海邊で貝殼を探してゐる圖である。本圖には眞珠母、黒眞珠色の鮑貝或は射出紅玉の眼の入つた貝などが實際に、紙上に寫してあつて、それ等の貝の蟲喰つた孔やまた數奇な極微な生物を描いてゐる。縞のある貝やバイの外皮のやうな薄層からなる蟲蝕形の水螅殼やまた海キャベツのやうに縮れたもの或は雲丹の背のやうなとげとげの針のある貝殼類も本繪本に描いてある。

第五十六圖　武家煤拂の圖



類も本繪本に描いてある。

そして本書は最後に貝合せをしてゐる圖で終つてゐる。それは若い婦人達の特殊な遊戯で、彼等が澤山の貝殻を竝べ、その周圍に蹲まつてゐる所を描いたのである。



麿の繪はそれ等以上に上出來で、立派な藝術的價値が高い。この繪本は恐らく『繪本蟲撰』と共に歌麿の價値を永劫ならしめるであらう。

今管江の序文を掲げることにする。

『田鼠化してぬかとりとなり、井蛙分して抄子となる。ころは彌生のよいていけ、皆口綿の袖か浦に、なのりそやつまむ、貝やひろはんと、潮の干潟に舟引あけて、沖の並居面々は、たそ誰に倉部行燈なめり、大盃をなかにすへて、さかなもとめにこゆるきの磯に、とりえし蜃のまてかた、昨夜の醉や引出しけん、顔はほのりと赤松秀成、酒に堪すとうちわふれは、いやまた〳〵と眞竹のふし藤ふしたるさかつきとり起して、させとさすかにやさ男、酒にまけてもかつらのまゆすみ、いさなのことときわかとゝのはらもゝの川水すふ勢ひは、桃酒とし御座あれと、はやしの竹のよみ人〳〵白濱此七軒のあるしをはしめ、つゝいて酒をたすくる人〳〵、すへて三十六人に及へり。是もと碌々のともからにあらす、皮むきのこちけい風流の士なり。酒三こんにいたれるころにや、こんは忽大鵬と化して、垂天の雲に羽うちわとなれり。その羽うちわのまねきに應し、たつのみやこの御城下までもと、千尋のそこをかちより行とて、ちくさの小貝をひろひえたり。えもといひしらぬ泣すからの、たのしひまことに千年を、故さと人によし語るとも、万本にはうけしとたゝ酒腹の、へらず口に井蛙には貝をかたるへからす。わか爛鍋の二見からら、歌仙の貝にことなすらひて、をの〳〵一首の狂詠をそふ。所かはれは品川みやけ、浦のあをさをかいあつむるにそ。

あけら管江書』

歌麿は日本に於て單に生活派の創始者としてのみでなく、また單に鳥魚蟲類の卓絶した模寫人としてのみでなく、彼は春畫の大家として賞讃されてゐる。春畫は日本に於ける單に若返りの畫を意味するばかりでなく、歐羅巴に於て我々が『輕い畫』として取扱つてゐるものをも含んでである。

私は一七九〇年の日附ある珍本を一冊持つてゐる。その表題は『普賢像』と云ひ、江戸の花見を題材としたものである。

この他歌麿の繪本に左の數種がある。

『繪本和歌夷』（天明六年蔦屋開板）。

『繪本銀世界』（寛政二年蔦屋開板）。

『普賢像』大本一帖彩色摺繪本は寛政二年耕書堂開板にかかる。本繪本を見ると、歌麿は寛政期に入るや既に一家の獨自的藝術を成立し始めたことが明瞭である。中にも飛鳥山の觀櫻の畫面がいい出來だと私は思ふ。その圖の左手にごちやごちやと澤山の女を樹木に集め、右手にばらつと描いた男に對照せれた帶圖の意匠は我が意を得てゐる。この繪本の序は後巴人亭光



といふ人が書いてゐる。

『繪本狂月坊』（寛政元年蔦屋板）。

『繪本四季花』（寛政十三年和泉屋市兵衛開板）。

## 二一

歌麿はその作品中に有らゆる種類の構圖を持つてゐる。彼はそれに依つて藝術的で偉大な想像的才能を持つたことを證明してゐる。私はその一例として『四人の唾眠者』と題する作品をあげたい。本圖に於て歌麿は昔の大家が殘したデッサンを模寫して、それを背景に使つてゐる。この場景は、ドーミエの恐ろしく滑稽な筆に依つて現はされた古代史の場面と關係がないと云はれないものである。

更にまた別の作品にその例を求めると、彼が人間に動物の變性を見出した圖がある。彼は人間の姿を動物に求めるのでなく、その優れた動物研究の結果として、彼は人間にある動物の姿と不安らしいものを與へたのである。

最後にもう一つの例としてあげるが、それは全く別な種類のもので、その各畫の上方に一對の眼鏡が描かれてゐて、その一方には『親の目鑑』とあり、他の一方のには『教訓』

第五十八圖　相合傘

第五十七圖　美人行列の圖

と書いてある。これは親が娘に對する倫理的批判を意味するであらう……若い女が老人を喜ばせ滿足させる私的生活を描いた揷物として見られるものである。

時には歌麿は現實生活を捨てて、夢のうちに美しい空想を馳せる圖も描いてゐる。私は彼の夢を題材に取つた十二枚の揃物を意味するのであるが、それ等の圖は眠つてゐる男或ひは女の夢が動作を伴つて現はれてゐる所を描いたものである。

日本人は夢は腦からでなく胸から出ると思つてゐるのか、恰も我々の聖人の口から出る護符のやうに、それ等の圖を見ると、夢が蝙蝠形をしてその上部へと擴がり段々と大きくなつてゐる。ここに若い娘が立派な食事を思つてゐる夢がある……卽ち彼女は貪るやうに食物を食べてゐる。また若い美しい娘が姫君となつた夢を見てゐる圖もある。彼女の乘物は大勢の從者によつて護衞されて田舍道を練つて行く所がそれに描いてある。また吉原遊女の夢も描いてある。またこの諷刺的な揃物の中には、歌麿は唯人間の夢ばかりでなく動物の夢も取扱つてゐる。老いた猫の夢を描いた圖に、猫の若い時代に主人の魚を泥坊した



所を見付かり、亭主にその背中を捉へられ女房に太い火吹竹で擊たれようとしてゐる所が描いてある。

## 二三

歌麿はその時代の誰よりも一層人氣を集めてゐた。

この世紀の初に當つてゐる一人の旅商人が引つづき商用の爲めに北國地方を旅してゐたが、彼は素人ながら版畫に熱狂的な興味を持つてゐたので、その通過する町々の蒐集家を訪問した。この旅人は豐國が殆ど知られてゐないのに、歌麿は日本國中を通じて最も偉大な畫家として認められてゐたといふことを斷言してゐる。私は版畫の中で歌麿の人氣を證明する一作品を發見してゐる。それは歌麿の特徴を持つてゐる刷物であるが、確に彼の弟子の一人が描いたものである。それは愉快な大きな船が描いてある圖であつて、その船は女の乘客で一杯になつてゐる。歌麿の筆は一生を捧げてこれ等の美しい女達を描きつづけた……この船に名前がついてゐる。曰く『うたまろ船。』

前記旅商人の話と『うたまろ船』の畫とによつて、晩年に於ける彼の畫房は、毎日依賴

第六十圖　兄弟睦敷圖　目出度三幅對

第五十九圖　青樓六歌選　唐歌

者や版者の爲めに詰めかけられた、實に日本に彼以外に藝術家がゐなかつたやうであつた
と云ふ人もある。

歌麿の畫才は支那でも等しく認められてゐた。支那の船商人が長崎に上陸すると、直に
彼の彩色摺版畫を澤山に買ひ入れたものであつた。

第六十二圖　二柱かけ

第六十一圖　橋下釣の男女

# 挿絵解説

白目とかなし　圖四十六第



蛇　圖三十六第

## 第一圖　婦女人相十品文讀む女　大判錦繪雲母摺

この文を讀んでゐる女の唇にほんのりと紅が差してある。彼女は黒襟藍小紋の着物を着てその袖口はいふまでもなく赤である。諸君はこの女がどういふ女であるかを考へる必要がない……ただ歌麿の雲母摺美人畫と思へばいい。勿論本圖以上に色ほいしたたるほど艶麗な美人畫をいくつも彼は描いてゐるが、本圖の藝術的價値は本揃物中の『ビードロ吹き』に劣らない。ここに筆者が開拓した美の獨自性がある。單に彼は偶然に、かういふ美人畫を描いたのでなく一定の原理の上に之を組立たのである、故に本圖は確實である。歌麿は本圖に於て眞摯な藝術心に畫面を支配させてゐる。彼はここに於て秀美明快な極に達したとさへいふことが出來る。彼は單に藝術的魔法師でなく、定石を守つて奇手に出る所の堂々たる大家である。

本圖は寛政六年頃の製作にかかつてゐる。

## 第二圖　婦人相學十體鏡に向ふ女　大判錦繪

本圖は素敵だ……恐らく浮いた女の相とでもいふのであらうか、肩の曲線一つが本圖の生命だ、それから上から下へと眞直にその線を引いた大膽な描法の面白味は何に譬へることが出來ない……浮世繪版畫の線で賞讃すべき線があるとすると、正にかういふ線をいふのであらう。この圖の線は一本として無駄な線

はなく、それが一本一本に朗かな音律を響かしてゐる。かういふ圖を見てゐると實に歌麿は名畫家であつたと今更のやうに感服させられる。これは雲母摺でなく鼠の背景を持つたもので、その鼠色が美人の着物の薄青色と工合よく對照して、ああ艶なりああ美なりと呼ばざるを得ない。版元蔦屋も澤山雲母摺を出したが、一寸變つたものとてかういふ簡單な圖を出してもう一度藝術的戰爭に勝利を得た譯である。

本圖は寛政六年頃の作品で、多分前圖の揃物即ち『婦女人相十品』の後に出版されたであらう。

## 第三圖　櫛を持つ美人　大判錦繪

寛政八年に江戸に名代の版元であり且つ歌麿永年の恩人であつた吉原大門口の蔦屋重三郎は死んだ。その一二年前から蔦屋は版畫の出版を止めなければならなかつたのではあるまいかと私は想像する……事實歌麿は寛政七年頃から他の版元から作品を出版させてゐる。本圖も近江屋出版で、近江屋はその後六枚續『雨國橋上橋下之圖』を出した版元である。此前に歌麿が近江屋から何を出したかまた何も出さなかつたかを私は知らない。近江屋は蔦屋の半身像の後から出す美人畫だから何か目先きを變へねばといつたやうな譯で、この圖の背景と櫛で鼻と口を匿くさせる意匠が生れたのではないかと私は想像する。本圖の背景のやうな意匠は勿論歌麿の創意ではない。古いことをいふと石川豐信にも鈴木春信にもある。またどちらが早いか知らないが歌麿と同時代の榮昌にもある。それから鼈甲の櫛から顏の下部を覗かせる意匠は、彼が前に用ひた紗か透綾の後から美人の顏が見える手法を模樣替へしたものである。本圖の女の髮形は當時勝山と稱せられたもので、結髮の流行が大形に變化して來たことを示してゐる。構圖は歌麿の半身像中で



いい部のもので落着いた姿勢に趣きがある。手の線と着物の線とが大小よく配合して見事な調和を呈してゐる。『歌撰び戀之部』などの作品ほど魅力はないが、決して不出來な美人畫でない。歌麿の版畫技巧はいよいよ冴えて來てゐるが、內面的に空虛な點があつて徒に外面的に走つてゐることを遺憾とする。歌麿もこの頃までが絶頂期でこれからは降り坂と云はねばなるまい。然しこの後の作に於ける藝術價値を私は全然否定するものでないことをここに云つて置く。

本圖は寛政七年度に出來たものだ。本圖の原畫は佛國巴里ルーブル博物館の所藏にかかることを附言したい。

## 第四圖　青樓雪月花春日野　大判錦繪

雪月花とあるからには三枚の揃物であらうが、本圖がその一つに屬して恐らくこの春日野は花を代表するであらう。本雪月花はいづれも黃の背景で赤と紅と黑とが基調色である。然し同じ無茶に細長い姿態の女でもまだまだこの時代の歌麿の女にはその後に於ける細長い姿態の多としたい。作品のどこかに筆者の緊張した態度が仄めかされてゐる。從つてその作が正直に出來てゐてそれから私共の受ける感じは喜ばしいものである。本圖の製作年代は寛政七年であらう。

本圖の美人は肢體が細く花車で榮之の美人に影響されてゐる。またその出版者も榮之の版元西村永壽堂である。

## 第五圖　娘日時計午の刻　大判錦繪

歌麿の『青樓十二時』の成功に續いて恐らく本揃物が出版されたのであらう。本圖は午の刻であるから正午から二時に至る間を意味するもので、構圖にさしたる面白味はないが、その調色は極めていい。立つた娘の着物が赤代赭色で背景の黄に見事な對照をなしてゐる。本圖の製作は寛政八年頃であらう。

## 第六圖　難波屋おきた　細判錦繪

これは寛政五年に出た細判兩面錦繪である。この種の版畫は二作品があるのみで、本圖の外は『高島屋ひさ』である。ひさの兩面繪はクルトの『歌麿』のなかに色彩復刻で出てゐるから知つてゐる人が多いであらう。この二作品は一枚の紙の表面に人物の前姿を現はしその裏面にその後姿を描いたもので、歌麿が一つの新しい試みをしたもので彼の作品中の珍品である。本圖は構圖や色やを鑑賞するよりか版畫技巧の苦心を買ふべきものである。勿論その色も惡くない……着物の地は淡紅色で白の櫻が拔いてある。前垂は薄綠でおきたの紋所卽ち桐の模樣がその下部にある。帶は紅一色で、彼女が手に提げた煙草盆も紅で塗つてある。かういふ鮮明な色彩を髮とお茶椀の盆の黑色で調子よく破つてゐる。おきたの姿態も溫雅を極めてゐて、『高島おひさ』の圖より遙に上出來である。



## 第七圖　通世山下綿一　中判錦繪

本圖に於ける京傳政演の影響は明白である。これは天明三年頃に作られたものであらうと私は想像するが、若し歌麿がその後鳥居清長の影響を受けず政演の深刻味をもつと深く堀り下げていつたならば、恐らく彼はもつと偉大な畫家となつたかも知れない。彼が清長の感化から自然に綺麗ごとに變化していつたことは殘念であると私は思ふことがある。政演は『山下花』の圖で女に黑い飛白の着物を着せて團扇と猫を配してゐるが、本圖の女も黑の飛白で手に團扇を持ち猫がその足にぢやれてゐる。蹲んだ女の肩に小兒が載つてゐるが、歌麿が將來小兒の描寫に一機軸を出すであらうことを既に暗示してゐる。この作は歌麿の初期の作品中で最も價値のあるもので、立派に政演の作品に匹敵し得るものである。灰色の背景を左手の格子が朱の色で破り、その側に立つた女は黑、蹲んだ人物二人は黃色と綠で、全體の配色は至つてくすんだものである。到底歌麿その後の作品に見るやうな明快な美はないが極めて印象の深い作である。題目の『通世山下綿』は多分下等な賣女の當世姿といふことであらう。時の流行歌にあつた『山猫比丘尼飯盛綿摘云々』とある綿摘のことではあるまいかと私は想像するが、若し間違てゐたならばその訂正を識者の親切に待ちたい。

## 第八圖　玄德と張飛

本圖の解說は本文『青樓畫家歌麿』の第一章の冒頭を見よ。

## 第九圖　唐美人遊興之圖　大判錦繪　三枚續

本圖は前圖『玄徳と張飛』よりも一二年後に出來たものであらう。歌麿が美人畫研究に熱中し始めた頃、その年齢からいふと三十歳頃のもので石燕の畫風を捨て所謂浮世繪の本領土に一つの席を要求しかけた時代の作であらう。天明八年に彼が出版した『繪本蟲撰』の如きは宗紫石の花鳥畫にあやかつたやうな描線を用ひてゐると云はれてゐるが、歌麿の支那畫の手法に對する興味は案外に深かつたと想像される。本圖を作るに至つた動機は前圖『玄徳と張飛』と同じであらうが、美人畫の要素が加つてゐるだけ彼は變化して來た譯である。今本圖を見ると彼が力一杯に描いた點を買つてやりたいと思ふが、如何にも人に混亂した感じを與へるものである。背景の山水は日本式で、隅から隅まで微細な注意を拂つた點を認めるけれどもその努力ほどの效果を上げてゐない。右端の建物も建築の原理に合はず殊に二階に立つてゐる人物の描寫も稚拙極まると云はねばならない。この一枚の中央に腰をかけた美人が日本の枕繪を眺めてゐるとその後に立つた美人が團扇を顏にあててそれを覗いてゐる點などに、時代の淫蕩氣分を仄めかしてゐると云へる。構圖からいふと左端の一枚がいいが、兎に角全體の感じがさほど面白くない。然しこの寫眞版で見ると構圖の不統一や描線の混亂が目立つて見えるが、原畫を見るとその調色が簡單で私共に一種の快感を與へる所がないでない。バイオレットと黄色とが主要の色で、右端の圖で立つた美人の着物のバイオレットは疊か敷物か知らないが黄色に塗つてあるものとその對照が惡くない。また背景の建物にも黄色が點々に施されてゐて畫面全體の調色はよく單純化されてゐる。



## 第十圖　青樓兩和嘉鹿嶋踊　大判錦繪

本圖の外題に『續』の字が入つてゐるがこの揃物の續といふ意味かそれとも鹿嶋踊の續であるかが分明でない。また本圖は歌麿天明末の傑作と云はれる『青樓仁和嘉藝者部』などと同じ揃物の一つであるか無いかも不明であるが、圖の感じやまたその筆致の點や構圖の工合などから見ると、本圖は天明四五年頃の作であらねばならぬと私は感ずる。然し落款の『畫』の字がいづれも朱摺になつてゐるが、製作時代が違つても題目が同じ濃艶な吉原情調のものであるから同樣の意匠を用ひたものかも知れない。この圖は重政演から清長に移つて影響を受けてゐるの感がある。鹿嶋踊といふ田舍じみた舞踊の女を描いたせゐであらうが、全體の調子が素朴に出來てゐる。人物の體がいやに肥つてその後の歌麿の美人とは驚くほど異つてゐる。

## 第十一圖　相州鎌倉七里濱風景　大判錦繪　三枚續

この圖位歌麿の作品中で清長の影響を明瞭に白狀してゐるものはない。從つて本圖の如きは春潮の作であるとしても通る位のものである……美人の肩がもう少し張つて肉感的であるとまるで春潮である。今本畫を見て私の氣になるのは人物の着物の裾である。畫面に風の空氣がとんと無いのに彼等の裾はややこしい位に亂れてゐる。かういふ細い部分に誇張的な表現があつて面白くない。勿論實景の描寫でないから畫

面の情調を單に美人畫として味ふべきであることはいふまでもない。背景はあつさり出來てゐて白い帆がその單調を破つてまづ成功的の背景と云へる。本圖の三枚の中左端のものが一番いい。今日の考へから天明時代の鎌倉見物はかういつた工合のものであつたらうが、左端に出てゐる牛などは恐らく繪空事の類であらう。然しこの左端はいい構圖である。

本圖の製作は天明五六年頃であらう。

## 第十二圖　青樓仁和嘉女藝者部大萬度　大判錦繪

歌麿がこの種の圖即ち青樓仁和嘉を描いたのはこれが二度目であるか三度目であるか不明であるが、この揃物がなかでも一番優美な出來である。本圖は二人の藝者は今仁和嘉に出ようとして、一人は艶美な着物をつけ他の一人はお化粧際中である。製作時代は天明末期で筆者が名を得ようとして全身の努力を傾注して作つたものであらう。餘りに描寫が細緻すぎて畫面全體に餘裕がないとも云へるが、兎に角歌麿はこの種の版畫に立派なものを遺してゐる。落款の畫といふ字だけを赤摺にしたのも所謂色ほい感があつて面白く、鼠の背色も濃厚な圖の畫面を浮きだせていい。序にいふが、歌麿ばかりでなく如何なる美術家でも名を成した頃の作品よりも名を成さない研究時代のものの方が遙に傑出してゐる。また傑出してゐないまでも、私はその嚴肅な眞實味に動かされざるを得ない。本圖の如きは正にその適例の一つである。



## 第十三圖　風流花之香遊上　大判錦繪

本圖の製作は寛政二三年頃であらう。清長も本圖のやうな向島百花園遊びを二枚物に描いてゐる。私は歌麿がそれを眞似たといふのでないが、恐らくそれからヒントを得たに相違ない。本圖は上の部だけで下の部にどういふ場面が描いてあるか想像することが出來ないが、勿論男子を女達に配したであらう。構圖としてはいささか平凡の感ではあるが、それだけ無理がない自然であつて私はその點を殊に喜ぶものである。

## 第十四圖　隅田川舟遊　大判錦繪三枚續の右端

本圖は歌麿三十七八歳の時即ち寛政二三年頃の製作にかかるものである。松平定信が天明七年に老中になつて田沼父子の放埒な方針を改革し紀綱の振肅を計つた。そのため寛政二年に出版物の取締令が發布されて錦繪も色の版木を制限されるに至つた。本圖はこの際出版されたものであるからその色數は極めて少く、畫面の調色は薄墨色を主としたものであるが、勿論題目が題目であるからこの單純な色が却て夜景の情調を落着かしてゐる。船體は薄紅色に塗つてあるが女達の帶は黑と綠の二色で、その着物も黑や赤味がかつた紫色である。色の上から見るとどこにも艶な所がないが、畫面に婀娜ほい抒情美が橫溢してゐるのは流石は將來有名な美人畫家となつた人の作だといふ感が深い。この『隅田川舟遊』三枚續の如きはそ

の後彼が描いた大作『兩國橋上橋下の圖』に對する瀬踏みの作といつたやうな一種習作じみた點がないでない。『兩國橋下の圖』に出て來る遊船の屋根に長い足をさらけ出して船頭姿の伊達な男が、はや本續物の中央の一枚に出てゐて矢張り船の屋根に乘つて大きな酒杯を手に持つてゐる。本續物はいふまでもなく『兩國橋上橋下の圖』と等しく川開きを描いたものだが、苦心の割りには藝術的效果が薄いといふ感がある。詰り構圖が何となく繁雜で畫心が亂れて一點集注の妙を逸してゐる……この點にたると流石清長は大家であつた。私はここで清長歌麿の比較論をするのでないからそれには觸れないが、本續物は一枚々々ばらにして見た方が全體を纏めて眺める時以上にいい感じを私共に與へるといふ原因はどこにあるだらうか。筆者歌麿は恐らく一枚毎に構圖をしてそれを續き合せて三枚續としたのではあるまいか……そのためこの作品は構圖が散漫になつてゐる。また背景が細く描いてある點も前景の人物を邪魔してゐる所がないでない。今本三枚續をばらにして一枚づつ見ると、ここに揭載した右端のものが一番優れてゐる。二艘の船首を右と左に交へさせ、そこに三人の美人を配置した點はいい意匠である。

## 第十五圖　江之島遊び　大判錦繪三枚續

鳥居清長は本圖を見た時果して何といつたであらうかと思ふことがある。これも前圖に劣らない清長張りの三枚續であつて、ただ美人の姿態に異つた點があるとすると、彼等が何となく小柄に見えて清長の美人ほど壯麗美に乏しいことである。本圖の背景は惡くないが、餘り複雜の感があつて前景の人物が大きく浮いて見えないといふ遺憾の點がないでない。その色も構圖のやうに多色で配色の工合ももう一工夫あつ



たならば、圖がもつと大きく見えたであらうと私は想像する。黃と綠とが他の作品に於けるやうに主要色であつて、これまでの歌麿の作品中でこれなどは最も成功した三作續である。恐らく彼の一代を通じての三枚續作品中での傑作の一つであらう。これを前に出した『唐美人遊興之圖』に比較すると、僅々數年間にかうも歌麿が進歩したのに驚かざるを得ない。如何なる藝術家でも模倣を以つて始つてゐない人はない……要はその模倣を如何に善用するかの一事である。歌麿は恐らく後年になつて清長模倣に對して感謝したであらうと想像されるが、彼はそれを打切つて一家の獨自性を發揮した時更に一段の歡喜を感じたに相違ない。この三枚續は要するに清長模倣であるが、左端の一枚に描いてある頰かぶりしたでれつとした男は清長の男でない點を考へると、歌麿は最初に男の姿態から所謂歌麿式を作り始めたものといつていい。どんな畫家でも何か一つ自分のものを作ることが出來ると、それからそれと自分の獨自性が育つてゆくの感が多い。歌麿の藝術的變化もこの經路を辿つたであらう。

本圖の製作年代は前圖とほぼ同じであらう。

## 第十六圖　平野屋の美人　大判錦繪雲母摺

この美人畫は歌麿の雲母摺美人畫として有名な『小伊勢屋おちゑ』と同時代の製作にかかり、恐らく同じ揃物の一枚であつたかも知れない。歌麿が女の胸像を試みた最も早い頃の代表的作品であらうと想像せられる。『小伊勢屋おちゑ』は一般によく知れた作品であるが、本圖は比較的人の知らないものである。これもおちゑの半身像と等しく河重の出版にかかり、等しく雲母摺である。本圖は寛政五年頃に出來たも

のであらう。背景の雲母摺が人物の着衣と完全に調和してゐて、これに依つて筆者は既に美人畫の大家であることが知れる。また本圖の雲母摺が效果をあげたので歌麿は引續いて澤山の雲母摺を作るに至つたのかも知れない。本圖とおちゑの顏とを比較するに姉妹なるかと思はれる位によく似てゐる……もとより題目は附いてゐても必ずしもその人を實際に寫生したものでなく、云はば理想的美人畫である。

## 第十七圖　おきたと瀬川菊之丞　大判錦繪

本圖は寛政五年頃の作であうが、おきたはその頃二十幾歳であつたか不明である。菊之丞は三代目をいふので寛政五年頃に彼は四十三四歳であつたであらう。この時代の浮世繪師の名のあるものはこの菊之丞を描いてゐる。然し本圖の菊之丞の感じは寫樂が寛政六年の『色競比翼塚』で傾城小紫に扮した姿を描いたものと似てゐるが、春英や清長は顏を長く描いて情味に乏しいやうに描いてゐる。『似顏大全』に出てゐる菊之丞の道成寺姿が春英清長の菊之丞に似てゐる。然し畫家の相違で同じ役者も違つた姿態に見えたに相違ない。私は特に菊之丞の圖についてのみ云ふのでないが、浮世繪師がもつと現實的につき込んでいつたならばどんなに讃美すべき效果を上げたであらうと思ふことがある。彼等は時の他の畫派の人と異つて現實に魅せられその諧調に醉ひ人間生活の個性美に觸れるといふ惜しい瞬間に擊退されて、卑怯にも生溫い理想主義の感傷的地帶へ逃げたの感がある。もつと浮世繪は意味のある藝術と成ることの出來る筈のものが、今日私共の見るやうな『第二の最善』といつたやうな藝術となつて仕舞つたといへる。役者を揃へた畫家で春章と寫樂は私共の希望に近いものを作つてゐる、そして風俗畫に就てこの問題をこ



浦圖

で簡單に語ることが出來ないから他の場合に讓るとしたい。兎に角浮世繪はもう一呼吸といふ所で最後の勝利を得なかつた藝術といへる。

## 第十八圖　難波屋おきた

本圖は歌麿が澤山描いてゐるお北物のなかで古くもありまた藝術的價値に豐かな作品である。彼が圖の上部に『繪判じ』を入れたお北の給仕姿と本圖を比較して見よ、卽座に彼の藝術が三四年間にどう低下したかを知ることが出來る。本圖は寛政五六年頃の作で、『繪判じ』入りのお北は寛政九年か十年の作品である。本圖には前出の『平野屋の美人』や『木挽町新やしき小伊勢屋おちゑ』の半身像に優に匹敵し得る價値がある。第十七圖のお北と本圖のお北が如何によく似てゐるかを見ると、實際のお北もかういふ恰好の美人であつたであらう……歌麿も段々と得手勝手に描くやうになつた時既に墮落期に入つたものと見て差支がない。本圖のお北には單に艶麗といふのみでなく、一種の氣高い品位がある。蓋し歌麿作品中の一逸品たるを失はない。

## 第十九圖　婦女人相十品ビードロ吹き　大判錦繪雲母摺

ああ、何といふ綺麗な色であらう……背景の雲母はまるで鏡だ、そしてその前に立ち紅市松模樣のぞろりと柔かい着物を纏つてゐる若い女は午前十時の器粟に譬へられる。若い女、これは評判の町娘であると

とはいふまでもない……彼女は時の流行兒娘島田を結んだばかりの清々した氣分でビードロを吹いてゐる。もう一度本圖の見事な色彩を見給へ。薄青色のビードロは薄青色の帶と相對し着物の模樣市松の碁盤目の間にも薄綠色の櫻が散らしてある。襟は淡紅色、袖口は赤で彼女は眞黒の髮の髷にも赤の布をつけることを忘れない。それに本圖の女が自由な柔軟な恰も藤の莖のやうな線で描いてあることだ……かういふ線は清長の線とは異つた持ち味のもので、圖の感じが如何にも艶な情趣で溢れてゐる。ああ、歌麿は本圖に於て完全に藝術を支配した、彼は美人畫の上に藝術の凱歌を唱へてゐる。

本圖の落款に『相觀歌麿考畫』とわざわざ斷つてゐる所を見ると、歌麿に自信があつた作品であると想像していい。彼は婦女の表情を研究することを以て一生の仕事と考へたに相違ない。彼の研究の領土は廣かつた、詰り女を中心とする人間世界の全部に亙つてゐた。私は嘗てかういつて、彼の情調を禮讃した、『一人の女から他の女へと、彼は抒情氣分を求め、美の酒杯と愛の酒杯との二つの間をセレネードした下町情調の抒情詩人である。稀有な情緒が動く、又更に驚くべきは、その動いた情緒が率然と靜定するに至る瞬間を、彼は美人の題材を通じて人間美を表現した天才畫家である。彼の女性的感受性は、その題材と技巧とが合一融和して破綻を見せない場合に、彼をして最も完全に情調を支配させてゐる。天才の人は凡て女性的である。歌麿もさうである。女性的畫家として彼が女を題材としたことは自然である。』本圖の如きは歌麿が女の情調を完全に支配して藝術に表現した作品の一であるといふことが出來る。

本『婦女人相十品』揃物は寛政六年の作であらう。



## 第二十圖　婦女人相十品煙管を持つ女　大判錦繪雲母摺

本圖も前圖同樣に歌麿半身像の逸品である。これが私共を特に喜ばせる點は人物の手にあつて、左の長い煙管を持つた手の恰好が目立つていい。本圖の冠榜内に何の相とも書き入れてないのは、恐らく本圖が後刷のものである證據であらう。

## 第二十一圖　婦人相學十體浮氣之相　大判錦繪雲母摺

本圖は『婦女人相十品』揃物と等しく一層優れてゐる半身像であると云へる。私共はこれだけが殊に浮氣の相とは思へない、歌麿の媚いた美人畫は概して浮氣物らしい感を私共に與へる……然しそんなことはどうでもいい。私共はただ作品の藝術的價値を鑑賞すればいいのである。藍模樣の着物に黄の帶をしめた湯上りの美人は、兩手で手拭を搾らうとしてゐる。この手の恰好は前圖の手の恰好と共に見事である。乳の描線もいいが特に頤の下に顯れた肩の骨の描線がたまらなく結構である。

本揃物も寛政六年の作品であらうと思はれる。

## 第二十二圖　歌撰び戀之部逢戀　大判錦繪雲母摺

本圖も歌麿の寛政六年度に於ける藝術の勝利を物語るに足る作品である。かういふ半身像を作つた畫家

も偉大であつたがそれを出版した蔦屋重三郎に私共は多大の感謝を拂はねばならない。本圖の美人は嬉しい文に接して逢ふといふ歡喜を幻に浮べてゐる所を描いたもので、眼が圓く長く引かれて感情が明晰に出てゐる。歌麿はこの頃の美人を額が出て頬がふくらみがちに描いてゐる。女の結髪も髷が段々大きくなつたといふ流行も本圖に於て仄めいてゐる。描線は明快にして畫面の情味は少しも停滯してゐない。

### 第二十三圖　歌撰び戀之部物思戀　大判錦繪雲母摺

本圖も前圖と同樣に『歌撰び戀之部』の作品である。これはなかなか私共の歡服していい作品であると思ふ……頬杖ついた手の恰好と顏との描線上の調和それに大膽な線形で描かれた着物の工合、何一つ缺點がないと私は感服してゐる。それから前髪へ自墮落に簪をさした樣子からこの女の屬する階級も想像されて、本圖の構圖は寸分の間隙がない。

### 第二十四圖　歌撰び戀之部あらはるる戀　大判錦繪雲母摺

本圖の藝術的價値は前兩圖に劣らない。女の手に持つ團扇の模樣や着物の模樣いづれも簡單に出來てゐて、人物の表情を純ならしめてゐる。頭を掻く手の工合も艶に出來てゐる。歌麿逸品中に加へていい作品である。



### 第二十五圖　風流五葉の松　大判錦繪

本圖は寛政六年の作であらうと思はれる。二人の若い美人が『汐くみ』を踊つてゐる圖である。筆者歌麿が手一杯に美麗を盡した作品である。これを清長の『汐くみ』と比較してみると興味がある。本圖には清長の美人に見るやうな希臘彫刻式壯麗な音樂美を見出さないけれども、歌麿にはまた別な藝術美があつて人を感動させるものがある。

### 第二十六圖　當世踊子揃吉原雀　大判錦繪雲母摺

本圖の踊子は鼠がかつた紅地の着物を身に纏つて頭に淡青色の紗帽子を被り、手に持つた踊り扇子の牡丹は薄紅色である。これはまた夢のやうに淡雅な感じを私共に與へる逸品である。ここに描かれてゐる幻のやうな踊子に相應しい色をしてゐる。吉原雀とは葦のなかに囀る騒々しい葦切（よしきり）の異名で暗に色里を素見ぞめき流して歩く客を意味してゐる。籠の鳥なる廓の女達にせめて功德の放生會とて鳥籠を肩に鳥賣と麿の精が素見ぞめきを押し分けての所作事である。本圖は寛政六年度の作品であらう。

### 第二十七圖　當世踊子揃鶯娘　大判錦繪雲母摺

寶暦十二年に市村座の舞臺で長唄を使つて瀬川菊之丞が鶯娘の所作事を踊つて以來、浮世繪の題目とな

り鈴木春信はそれをさまざまに描いてゐる。戀の妄執が雲のやうに蔽つた朧夜に女の怨靈が白鷺となつて踊る所作事であるが、本圖の娘のやうに美麗では幽怪味が薄い。然しこれは當世の踊子だ……戀の妄執が綺麗な花帽子を被つた美人と化けて舞臺に美の表象となり諧音のリズムを響かせる。本圖の美は前圖に劣らない。衣裳に散らし梅を波模様に配した圖案はいい。

## 第二十八圖　おひさの半身像　大判錦繪

本半身像は天明七八年頃出た『小伊勢屋おちる』のやうな大判半身像に近い藝術的價値を持つてゐる。所謂歌麿式と世に云はれる濃艶な姿はないが、これも歌麿の傑作の内に入るべきものである。彼の三枚續には描線が徒に複雜で弱い所があるが、本半身像の描線は必ずしも強いのでないが少しも亂れてゐない。彼がかういふ簡潔明快な半身像を描くに於ては人の知らない所の苦心を要するものである。歌麿は藝術的細心の努力を注いで本圖の布置經營をしたと思はれる。これなど彼がおひさを描いた作品中の最も私共を感服させる作である。本圖の製作は寛政六年頃であらう。

## 第二十九圖　炊事場の景　大判錦繪二枚續

本圖は別々に見た方がいい。二枚を合はせて見ると構圖が纏まり過ぎ窟や手桶が中央に出しやばり、その側の人物が浮きでない。然し一枚一枚に見ると人物が圖の主要部にあつて、着物の線や模様が見えて來



る。殊に右の方が遙に立派で、立つてゐる女の顏付きその手の描法など流石は歌麿だと感ぜられる。左の一枚に子供を入れて人情美を添へたのも炊事場の景として面白い。

## 第三十圖　青樓十二時子の刻　大判錦繪

私は曾て本揃についてかう書いてゐる、『御覽なさい、これ等の女の體は不自然に細長い、恰も縮緬肌の白い飴を兩端から引きのばしたやうな恰好だ。また御覽なさい、ぞろりとした輕いやうな重いやうな着物はその體を離れようとしてしかも離れたくないといつたやうに絡りついてゐる。これが天下に有名な歌麿の强度感覺美の凝つて女性となつたものであらうが、私はそれを是認することを悲しむものでない。私は白狀するが時には頽廢的藝術の愛人を以て任ずることがある。眞夜中官感慾の篝火を焚いて邪宗の殿堂の祭壇の前で踊りぬくことは喜ばしいことだ。私は歌麿の描いたこれ等の不思議な淫奔多情の女達の繪を眺めてゐると、私の想像の眼は豫期した方角から展開して來る世界に接するやうに感ずる……何を私の眼は見るであらうか、私の眼界に入つて來るこの不思議な世界に、縱に横に廣い黒漆で塗つたやうなぴかぴかした廊下が走つてゐる。その廊下には右に左に肉慾の祕密室が行儀よく並んでゐる……そこへ立留まつてゐると寂寞味と淫佚的希望が何か耳語し合つてゐるのを感じる。私はここで聞いてはならない女性の祕密を立聞きしたやうに戰慄を感ぜざるを得ない……兎に角彼は私に恐ろしいやうな嬉しいやうなものを見せて呉れた。』

本圖は『青樓十二時』の子の刻で遊女が遣手（やりて）に着物をたたませて寢室入りの用意をしてゐる所である。

遊女の着物は藤紫で紅の櫻が裾模様として散つてゐる。遊女の帶は艶な紅で、寢卷の着物は黃であつて、遺手の藍の着物を入れて詰り紫紅黃藍の四色が深夜の寢圍氣のなかで美はしい一曲を奏でてゐるのである。寂しいけれども美はしい作品だ。本圖の製作年代は寬政七年であらう。

### 第三十一圖　青樓十二時丑の刻　大判錦繪

本圖は丑の刻で早や明けやすい夜の三時頃の圖である。遊女は寢室をそつとしのび出で眉を描く桐の木を燒き、その墨で一筆祕密の戀人に交通しようといふ所を描いたものであらう。然し私共はこの遊女が手に持つ桐の木の光に誘はれて、歌麿の感覺的藝術の波狀形をなしてゐる纖細な道へ入りこんで行くやうに感ずる。ここに描かれてゐる遊女の心にも眞珠のやうな戀の微光は漂つてゐる……それを思ふと歌麿は澤山の遊女を描いてゐるが、本圖のやうな深い正直な感じを私共に與へる作品はない。實際に本圖は歌麿の有名な半身像以外のなかでは最も人を惹き附ける眞實味を持つた傑作といつていい。恐らく歌麿はありふれた遊女生活の一場面として描いたであらうが、私共はその痛ましい現實に動かされる。

### 第三十二圖　青樓十二時辰の刻　大判錦繪

遊女は客を送り出して暫時の熟睡を取らうとして蒲團へ潛込む所を描いたのが本圖である。構圖の上からいふと取立てていいものでないが、色は第一に蒲團の朱とバツクの黃との對照が見事である。横になつ



た女の着物は赤味を帶びた紫色で、夜具の地色は薄青色だがその袖は紫である。そして側の衝立に薄墨色の模樣がついてゐる。かうして見ると本圖は赤と黃と青と紫との四つが合奏してゐるので、色彩の裝飾的效果を完全にあげることの出來た作品である。歌麿の色に對する天分は豐かであつたことを示す一標本とも見ることが出來る。勿論その點に於ても本圖よりいいものはあるが、本揃物のなかでは傑出した色を持つてゐる。

### 第三十三圖　青樓十二時巳の刻　大判錦繪

本圖に前出の『丑の刻』に劣らない寧ろ優れてゐるとさへいへる空間の活用がある。立つた女立膝した女の兩人をスペースが取卷いて面白い美の表現をしてゐる。立つた女は今朝湯をすました所である。彼女の浴衣は歌麿の好きな藍絞である。歌麿も本圖の女のやうな背の高い姿をこれまで描いたことがない。着物をはいだならばこの女は畸形としか思はれない體格をしてゐるが、そんなことをいつてゐるやうでは到底歌麿の美は鑑賞することが出來ない。私共は本圖のいい描線と畫面の釣合を重んじ人體の形式まで破つた彼の藝術心を褒めねばならない。彼の趣致はますます深くなつて藝術を弄せんとする危險に際會してゐるやうな感じはあるが、彼は當然進むべき路を今進んでゐると云へる。

### 第三十四圖　西村板山姥と金太郎　大判錦繪

### 第三十五圖　蔦屋板山姥と金太郎　大判短册形錦繪

この山姥と金太郎が浮世繪の世界へだれが始めて持ちこんだか知らないが、少くも歌麿はこの題目を一般的ならしめた人であつた。彼が描いた山姥と金太郎はその種類四十にも及んでゐるといふことである。その中で蔦屋出版のものが一番優れてゐる。概してこの種類の作品は寛政末期に出たものが多いがなかには蔦屋重三郎が生前に出版したものも多少はあるようだと思はれる。歌麿はゴンクウルに從へば靑樓の畫家で主として女性美を繪畫で歌つた抒情詩人であつたが、その一面にはまた小兒を使つて母性愛も極めて眞摯に傳へてゐる。殊に山姥と金太郎の圖に於ては朱の體をした奇怪な金太郎と艶麗であり乍ら野性を帶びた山姥との取合せであるから、その母性愛が一種の幽怪味を帶びて人を魅し去る點がある。この種類の圖が如何に時の趣向に投じたかは容易に想像される。ここに出した兩圖に於て私共は金太郎の姿に力の象徴を見出し、山姥と相對してここに剛と柔の二回奏を聞くやうに感ずる。また金太郎は滑稽的に出來てゐて、場面が風俗繪化されてゐる所に面白味がある。

### 第三十六圖　頃日時計未の刻　大判錦繪

本圖は午後二時から四時までを意味するもので、前圖の女（その女でなくても誰でもいいが）は湯を出



て一休みしてゐる所である。この構圖はよく纏つてゐるだけ餘情がないが、歌麿はここでは格子で作つた衝立をうまく使つてゐる。その衝立によりかかつてゐる女の着物はかなり美妙に動いてゐる描線で描かれてゐる。本圖の製作は寛政八年であらう。

### 第三十七圖　蟲籠を持つ美人　大判錦繪

本圖は色刷挿繪に入れた『楴を持つ美人』と同じ揃物の一つである。もとより前期の大類物に比してその價値は劣るけれどもかなり美麗を極めたものである。背景に一特色があつて、着物の模様が簡單であつて、描線が巧に出來てゐる。寛政八年の作。

### 第三十八圖　北國五色墨川岸　大判錦繪

本揃物は前の『婦女人相十品』や『婦人相學十體』に眞似て出來たものである。これはそれ等の美人畫に比較すると題材が恐しく下卑てゐる。然しその藝術的價値は決して『婦女人相十品』や『婦人相學十體』に劣るものでない。『北國五色墨』のなかで本圖は最も印象の深いものだが、如何にも荒み切つた川岸淫賣婦の肉感的情調の曝露が氣になる。然しこの女の楊枝を使つてゐる手や腕の恰好は如何なる彫刻家も刻むことの出來ないほどの美を持つてゐる。本圖は珍らしい位に立體的表現が明晰であつて、一度見たら恐らく忘れることの出來ない作品といつても過言でない。本圖は寛政八年度のものである。

### 第三十九圖　針仕事　大判錦繪

本圖は三枚續の左端の一枚である。歌麿は遊女の繪ばかり描いたのでかういふ女の家庭生活の好場面も圖に取つてゐる。人物の表情も溫和掬すべきものがあり、それに子供をあしらつた工合が如何にも好箇の作品といふべきである。殊に黒の帶が調色の重要部分を作つてゐる。本圖の製作年代は寛政八年度である。

### 第四十圖　髪を結ふ二美人　大判錦繪

私は英文『歌麿』の帙に張つた外題の繪に本圖の一部分即ち後部で鏡を見てゐる女の後姿だけを使つたことがある。これは所謂歌麿情調の溢れてゐる一好圖である。後部で鏡を見てゐる女の着物は紫がかつた紅色で、前部の大きな女の着物は鼠地である。バツクは黄色で鏡臺は黒でその前の箱は朱である。色の配合は申分がなく畫面全體の調和に缺點がない。勿論無難なだけそれだけ奇手を打つたといつたやうな點がなく人を驚かさない、云はば豫定通りの好圖である。これも寛政八年度に出來たものであらう。

### 第四十一圖　蚊帳の內外　大判錦繪

これは『婦人泊り客圖』三枚續と同種類のもので、その製作年代も同じ寛政八年頃であらう。この時代



の作品は技巧に優れてゐる。彫師摺師と畫家歌麿の三拍子が完全に揃つた時代ではあるが、その精神的內容は前時代に及ばなくなつてゐる。本文第五章中『婦人泊り客圖』の冒頭を參照してもらひたい。

### 第四十二圖　浴後の美人　大判錦繪

私は英文『歌麿』に本圖を入れるため松方氏から氏蒐集中のもの即ち本圖を借用したことがあるが、不幸にも鏡中の顏が眞黒で印度人のやうに見え、美人の頰や手のあたりのお白粉が眞黒になつて鍋墨を塗つたやうであるのを遺憾とする。これは薄鼠色のバツクへ藍模樣の浴衣を着た清艶を極める女の半身像である。『青樓七小町』の內扇屋の瀧川と同系統の作品である。そして本圖の方が遙に瀧川の半身像よりいい。これは寛政八年頃のものであらう。

### 第四十三圖　隅田川の花見船　大判錦繪三枚續

本三枚續は歌麿の續物中最も出來の優れた作品で、その藝術的價値は『鮑取り』に匹敵し得ると思ふ。第一にその構圖が簡單であるのが嬉しいと云へる。背景と人物とがいふに云へない諧調的合一を表現してゐる。右の一端の一棄に出てゐる船頭は、歌麿のその後に作つた『雨國橋上橋下の圖』に出て來る様子の男で、本圖に既にその豫感があるといふことが出來る。かういふ圖を見ると歌麿の構圖上の手腕は決して清長に劣るものでないと思はれる。本圖の製作は寛政八年代であらう。

### 第四十四圖　當時全盛美人揃雛鶴　大判錦繪

本圖は『當時全盛美人揃』の一枚である。これを『六玉川』の雛鶴に比較してみるとどこかその姿が互に似てゐる。私に歌麿は女を單に理想的に描いたので、どんな名前が付いてゐてもそれはどうでもいいといつたが、彼は必ずしもさうばかりでは無かつたかも知れない。この雛鶴といふ遊女はいつも優美に描いてある所から、本人の性格もほぼ推察される。それは兎に角として、本圖の背景は黃、着物の地は赤味がかつた鼠色で薄紅の緣がぼかしてある。もとより派手な繪でないが、艶美の情調が地味な所から幽かに光ると云へる。本圖の製作は寛政八年であらう。

### 第四十五圖　當時全盛美人揃小紫　大判錦繪

本圖の妙所は人物が左の手を袖のなかに入れて煙管を持つた態とらしい様子、殊に袖口の描線の旨味にある。全圖の淡雅な配色が濃厚な帶の色で引締められて一段と喜ばしい感じを私共に與へる。然しこの時代のものを見ると歌麿の藝術もやや衰へかけて來たかの感なきを得ない。

### 第四十六圖　當時全盛美人揃唐土　大判錦繪

本圖はこの揃物のなかで歌麿が手一杯に立派に描いた繪である。この女の疊へついてゐる左の手の恰好



も結構で、それを右の團扇を持つた柔かい手に對照させた所もいい。體の形が顏より大き過ぎるの感はあるが、兎に角出來のよい如何なる素人が見てもすぐ歌麿物と思ふことの出來る美人畫である。

### 第四十七圖　當時全盛美人揃花紫　大判錦繪

本圖の構圖は一點の非難の打ち所がないほど完全である。殊に膝の描線や着物の線が目立つていい。それから兩手を組んだ形にいふに得ない妙味がある。藍がかつた小紋の着物が地味であつて艶を添へてゐる。調色構圖共に結構だが、前にいつたやうにここに歌麿の疲勞があるのを見出して一種の悲哀を感じさせられる。

### 第四十八圖　口紅をつける女　大判錦繪

本圖は上村永壽堂から出てゐる。歌麿は少くも三枚のこれと同じ題目で立派な藝術品を作つてゐる。その中でも本圖は恐らく最もいい作品であるかも知れない……第一に女の着物の描線が簡單に明晰に面白く出來てゐる。それから鏡と女の着物の襟などの黑色に膠を交ぜてその色に重厚味が加へられてゐるから、畫面が立體的に見えて落着がある。初期時代の作品には墨に膠を交ぜた漆繪が澤山あるが、錦繪時代になつて膠の應用が少くなつた。これを歌麿がここに適用したことは彼の賢明さを物語るに十分である。彼は昔からあつた技法を活用してゐる。雲母摺の如きもその一例である。本圖は纖細の感があるが私を最も喜

ばせる歌麿物の一つである。

本圖の製作は寛政九年度であらう。

### 第四十九圖　錦織歌麿形新模様文を見る女　大判錦繪

本圖の人物を後にしてここに書き込んである歌麿の藝術的抱負にまづ私共は注意を拂ひたい。『夫れ吾妻にしき繪は江都の名産なり然るを近世この葉畫師專ら蟻のごとく出生し只紅藍の光澤をたのみに怪敷形を寫して異國迄も其恥を傳る事の歎かはしく美人畫の實意を書て世のこの葉どもに與ることしかり。』これを讀んで歌麿の性質まで及んでその心理狀態を推量すると、彼はかなり粗剛な男子的一面を具へた人であつたかも知れないと感ぜざるを得ない、詰り彼に挑戰的勇氣さへあつたらしく思はれる。故に本圖の冒頭にある文字は歌麿の個性を解釋する好資料とも成るであらう。そしてこの堂々たる意氣込みに本圖の藝術的價値は相應しいものであらうかが問題である。私は勿論名作の一であることを許すに吝なるものでないが、彼はもつとこれ以上に立派な作を以前に作つてゐる。藝術家はだれでも今日を以て作日に劣ると思ふものはあるまい。して歌麿も本圖の出來た寛政九年度の作品を『婦女人相十品』時代に劣つたとは感じなかつたであらうが、今日私共は本圖に多少歌麿の藝術的疲勞の跡を見ない譯に行かない。勿論その技巧は冴えてゐる、詳細の注意はよく行き屆いてゐる。然し畫面の魂は以前のものほど大きなものでない。本圖を版畫の技巧から見ると、第一に紫色の着物が板ボカシの手法で藍の陰影を出してゐる。白綸子の襟がカラ摺で模様を浮出にし、帶は網代垣に菊の模様で表はしてゐる。いふまでもなく版畫としては最高潮の



上に立つたもので、歌麿の苦心は私共は十分に認める。然し前にいつたやうに彼の藝術心に一進歩を劃したものとは云へない。

### 第五十圖　腰をかけた美人　大判錦繪

本圖の價値はゴンクウルが賞讃してゐる。寛政九年度の傑作の一である。

### 第五十一圖　孝行娘　大判錦繪

歌麿はこの種の作品即ち夢を見てゐる女をいくつも描いてゐるが、本圖の如きはその中で最も優れたものである。

### 第五十二圖　子供をあやす母親　大判錦繪

歌麿の母性愛を取扱つた作品は多い。これなどもこの種のなかで上出來のものである。藍地に波模様の着物に愛らしい感じがあつて、新鮮の氣分を添へてゐる。圖の背色は鼠、小供の腹帶は赤。

### 第五十三圖　子供と兎　大判錦繪

本圖の表題は字が讀めないから不明として置くが、構圖は惡くない所かなかいい所がある。殊に全體の調色が面白い。といふのはそれがすべて鼠がかつた赤を以て主色としてゐて、衝立の枠が紅で塗つてある。本原圖の色は褪色してゐるため、一段と幻といふ感じを人に與へて喜ばしい。

### 第五十四圖　驟雨　大判錦繪五枚續の內三枚

本圖に關しては本文第五章中に書いてあるゴンクウルの言葉を參照して下さい。本文中に三枚續としてあるが、五枚續の誤り故ここに訂正して置く。そして本圖三枚は左からのものである。

### 第五十五圖　兩國橋下の圖　大判錦繪六枚續の內三枚

本圖は橋上橋下の六枚物の下の方三枚だけである。これは東京博物館の所藏する所のものだが、その保存法が粗略で日光にだらしなく曝らしたがため、殘念ながらその色が褪せてゐる。然しかう六枚物が存在してゐるものを持つてゐる所は、世界を通じてさう澤山はない、兎に角大事にして貰ひたい。本橋下の圖のなかで一番價値のある圖は右端のもので、船から船へ移らうとする光景が極めていい。本全圖はいふま



でもなく色彩の配合と川舟や橋柱や水などの關係上に歌得獨その畫趣ある名品たることはいふまでもないが、一枚一枚ばらにして見た方が遙に引締つた感じを人に與へる。橋口五葉氏は本圖に關してから書いてゐる。『初めから大畫面を一圖に作り、これを六つなり三つなりに切つてやつたものでなく、一枚毎に構圖をたて、これを續け合せ、その綜合によつて大畫面をなすの計畫をたてたものらしい。從つて續き物のどの一枚をとつても、それだけで圖柄が纏つて居り、決して全體の爲めに部分を犧牲に供する樣なことはして居ない。寧ろ稍〻全體を二次的の位置に置く觀がある。別々に見れば面白いがつなぎ合せて却て興味の淺くなるものがある。兩國橋の圖の如きは其の一例である。』

本圖の製作年代は寛政九年か十年であらうとされてゐる。

### 第五十六圖　武家煤拂の圖　大判錦繪五枚續の內三枚

本圖は五枚物であるが、その價値はここに掲げる三枚に盡きてゐる。本圖の解說は本文第五章のなかを參照せよ。製作時代は寛政十年頃。

### 第五十七圖　美人行列之圖　大判錦繪

本圖は六枚續であるがここにはその最後のもの卽ち右端の一枚を出したのである。その解說は本文第五章中にある。

### 第五十八圖　相合傘　大判錦繪

歌麿は寛政末から享和にかけてこの種のものをいつも描いてゐる。本圖はその中で一番いい出來のものである。これは梅川と忠兵衛の道行であらう。

### 第五十九圖　青樓六家選唐歌　大判錦繪

本圖は享和二三年頃の作品で、最早や歌麿にも昔日の藝術はないと云はねばならない。人物を右側によせて描いた藝術的奇智は感服に價するが、人物の顏ものつぺりし過ぎて旨味がない。畫面に表現されてゐる感じも小さい。

### 第六十圖　兄弟睦敷圖目出度三幅對　大判錦繪

最早や歌麿も昔日の面影はないが、これなどは彼の衰頽期をかがやかす夕日の一種と見ることの出來る作品である。彼も老いて倫理的になつたものか、本圖の如きは遊里の姿でない。坐つてゐる娘の手に持つ書物は論語であつて、『子曰巧言令色足恭左丘明恥之云々』の文字が讀める。立つてゐる娘の着物は黒地に櫻花が陰陽に染抜いてある。紅の下着に、破れ芭蕉を紅にした帶をしめてゐる。坐つてゐる娘は膝の上



に反物を載せ、鼠潰しの背景が本圖に柔かい情調を添へてゐる。享和二年頃の作品であらう。歌麿の藝術も段々最後に近づいて行く。

### 第六十一圖　橋下釣の男女

本圖は前出第六十圖『兄弟睦敷圖目出度三幅對』や『近代七才詩歌』の揃物と同時代に出來たものである。『近代七才詩歌』も本圖も歌麿が始めて試みた大判短冊形で、本圖に於て歌麿は人物の影が水に映じてゐる所を描いてゐるが一寸思付である。この時代になると彼の人物は表情が薄ぺらで前時代の作品に於けるやうに落着いた艶麗美に乏しい。故に畫面が極めて小さく見えてならない。

### 第六十二圖　二柱かけ

歌麿は柱かけ形の作品にはさしたる手腕が無かつた。黒の頭巾を被つて風に逆ひながら行く女はまるで清長の柱繪『藤花の下を行く女』を模倣して及ばざるものか。徒に誇張したかの感のみが目立つて左程面白いとは思はれないが、歌麿の柱繪中では上出來のものであることはいふまでもない。もう一枚の方の『梅川と忠兵衛』は所謂歌麿式のもので、極めて無難の作であるといへる。恐らく彼の柱繪中で最も成功したものであるかも知れない。

第六十三圖　**蛇ととかげ**　彩色摺『繪本蟲撰』

本圖は天明八年蔦屋出版の大本二冊彩色摺『繪本蟲撰』より抜いたもの、本書に關する詳細は本文第十七章の冒頭を見よ。

第六十四圖　**ゐなかと目白**　彩色摺『百千鳥』

本圖は寛政初年蔦屋出版の大本二冊彩色摺『百千鳥』より抜いたものである。本書に關する詳細は本文第十七章の冒頭を參照せよ。

第六十五圖　**汐干狩**　彩色摺『汐干のつと』

本圖は寛政元年蔦屋出版の大本一帖彩色摺『汐干のつと』より抜いたもの、本畫帖に關する詳細本文第十七章の冒頭を見よ。

第六十六圖　**櫻見**　彩色摺『普賢像』

本圖は寛政二年蔦屋出版の大本一帖彩色摺『普賢像』より抜いたもの、本畫帖に關する詳細は本文第十七章の冒頭を見よ。

第六十五圖　汐干狩

第六十六圖　櫻見

ゴンクウル
の
# 歌麿

昭和四年六月八日印刷
昭和四年六月十日發行　初版千五百部

定價五圓

譯著者　野口米次郎

刊行者　長谷川巳之吉

刊行所　東京麹町區一番町五
第一書房
振替東京六四二二三
電話九段 三三四四 三五〇九

印刷者　萩原芳雄

製本者　橋本久吉

I-39
-16

第一書房刊行書目

野口米次郎著　表象抒情詩・・・　四六判背革美本全四冊定価各一圓八十錢
野口米次郎著　人生詩集・・・　四六判定價二圓五十錢
野口米次郎著　歌麿北齋廣重論・・・　菊判挿絵三十二枚定價一圓
野口米次郎著　春信清長寫樂論・・・　菊判挿絵二十二枚定價一圓

野口米次郎ブックレット三十一冊定價各五十錢

芭蕉論　萬葉論　戀愛の詩人
芭蕉俳句選評　松の木の日本　畫境の人々
蕪村俳句選評　神祕の日本　印度の詩人
蕉門俳人論　眞日本主義　舞臺の人々
光悦と抱一　米國文學論　愛蘭情調　人生五十年
光琳と乾山　ポオ評傳　海外の交友　米次郎隨筆
能樂の鑑賞　小泉八雲　外人の心理　米次郎獨語
藝術の東洋主義　詩の本質　自然禮讚　米次郎講演